

「青年海外協力隊」

工藤 篤志さん

KUDO Atsushi

長年の夢だった協力隊
障害児のリハビリに取り組む

2010年12月、チュニジアでは貧困・雇用対策を求める大規模抗議デモが各地で発生し、2011年1月には反政府デモに発展。革命が起き、市民の力で民主化への道を拓いた。この10月には制憲議会選挙が行われるなど、新しい国づくりに向けて一歩ずつ進んでいるところだ。首都チュニスから南東へ約50キロ、メンゼル・ブゼルフアという町がある。ここで現在、青年海外協力隊員の工藤篤志さんが理学療法士として活動している。派遣先は、チュニジア全土に70以上の支部を持つNGO「チュニジア知的障害者援助連盟」のメ

PROFILE

1981年岐阜県出身。北海道大学医療技術短期大学部卒業後、理学療法士として北海道大学病院に就職し、5年間臨床に携わる。2009年保健衛生学士取得。2010年3月より青年海外協力隊（理学療法士）としてチュニジアで活動中。

JICA Volunteer Story

「体を動かさずリハビリを取り入れて 子どもたちを笑顔にしたい」

政変に揺れる北アフリカの国チュニジアで、理学療法士として活動中の工藤篤志さん。一時退避を余儀なくされ、今年4月には東日本大震災の被災地でボランティアに参加。日本で、そしてチュニジアで実感した「人と人のつながり」が心の支えとなっている。



ンゼル・ブゼルフア支部。知的障害や肢体不自由といった症状ごとに15のグループに分かれた子どもたちに、サッカーなどの運動、パズルや工作、アラビア語などを学んでもらう施設だ。「日本でいう特別支援学校のようなところだ。また、私を含めた3人の療法士が必要な子どもに対し医療的なりハビリを実施しています。その内容をより充実させるのが私の任務です」と工藤さんは話す。

国際協力に関心を持ったのは中学生の時。テレビ番組で、農業指導を行い途上国の人々の笑顔に囲まれている日本人を見て、その姿にあこがれ、青年海外協力隊に参加することが目標になった。理学療法士になったのも、興味がある分野で専門性を磨けば国際協力でも力になれると思ったから。就職した大病院では、がんや心臓病の手術を受けた患者さんのリハビリを担当し、臨床経験を積んだ。そして約10年が経過した2010年、満を持して協力隊に応募。チュニジアへの派遣が決まり、夢の実現に向けて歩み始めた。

治安悪化で一時退避中に 福島でボランティア

ところがチュニジアの状況は、日本とはまるで違った。「障害者を保護する制度や施設が十分整備されておらず、リハビリも10〜20年前の日本が行っていたような方法。そればかりか、障害者の自立を支援する」という視点すらなかった」という。また、障害児の学業を手助けする特別教育士の知識や経験が乏しく、さらには、異なる職種の療法士がチームでリハビリに当たるといいう考え方も広く浸透していない。

こうしたたくさん問題がある中で、まず工藤さんが取り組んだのが、身体障害のある子どもに体を動かしてもらおうこと。障害の症状が適切に把握されていないかったり、リハビリ用具がそろっていないという課題もあったが、何より問題だと感じたのは、「この施設で



a.腹筋と背筋の筋力が弱く一人では座る姿勢を取れない子どもにリハビリを行う工藤さん。子どもの肩を手で支えながらトレーニング
b.手や腕の機能回復は輪投げを楽しみながら。同僚の作業療法士イネスさんが子どもをサポート
c.チュニジアからの一時退避中に、東日本大震災の避難所となったJICA二本松訓練所でボランティア活動。被災者の身体的ケアを行った

働くスタッフたちが皆、障害児はじっと座っていればよいと考えていた」からだ。そこで、筋力が弱い子どもが何かに寄りかからなくても座っていられるようにするための練習や、車いすからベッドへの移動、バランス感覚を鍛えるためのキャッチボールなど、障害の種類や程度に合わせてリハビリを自ら実践することで、療法士たちにその必要性を理解してもらおうための努力を続けてきた。

その結果、リハビリを続けた子どもたちに変化が……。 「一人で座っていられるようになったり、車いすに乗って自力で移動できるようになったり。その喜びを子どもたちと共有できた瞬間は本当に幸せ」と工藤さんは笑顔で話す。さらに、こうした取り組みの積み重ねにより、「少しずつでも、療法士に、体を動かさずリハビリの大切さが分かってもらえれば」と思いを込めて活動してきた。

そして迎えた2011年1月。政情不安により、余儀なくされた日本への一時退避。その中で発生した東日本大震災。JICAからの要請を受けた工藤さんは、避難所となった福島県のJICA二本松に向かい、避難所の状況把握や生活環境づくりのほか、理学療法士の専門性を生かし腰痛を訴える高齢者へのマッサージなどを行った。「でも、福島の皆さんのために何かできないかと思っ行ってはしたが、実際は被災者の方々の逞しい姿に自分が力をもりました」。

現地の治安回復を受け、再びチュニジアに派遣されたのは4月下旬。施設では、同僚や子どもたちが日本のことをとても心配して待っていた。「それがとてもうれしくて。今の活動のモチベーションになっています」と工藤さん。

残りの任期はあと4カ月。この1年半で築き上げてきた信頼関係を大切に、同僚をもっと巻き込みながら、多くの障害児が楽しく体を動かせるようなりハビリプログラムに取り組むことが、今の最大の目標だ。



東日本大震災を受け、子どもたちと福島県民へメッセージを送る工藤さん

※起き上がる、座る、歩くなどの動作ができるようになることを目指し、運動障害を対象に治療を行う専門職。